

立命館大学校友会・東北応援ツアー＝レポート＝

「岩手県の被災地を巡って」

兵庫県校友会顧問 中野友擴

東北応援ツアーへの参加は、十九年前に震災を受けた神戸市民としてゼヒと思っていたので心の準備を整えて出かけた。

前日、仙台に入り友人と会って仙台の様子を聞いたが、街は大都会の様相を呈していて、被害については駅前では分かりにくかったが友人は「千人弱の死者が出、津波の被害は大きかった。君が下りた空港もやられたよ」と言われ胸が痛んだ。

翌日、新幹線で新花巻に行き皆と合流。一泊二日のツアーがスタートした。駅から一時間は走ったろうか、最初の被災見学地、陸前高田に着く。雑草の草原に出来た追悼施設で黙祷。あらためて語り部の話を聞く。大きなパネルを示して実はこの野原には町があったのだと言う。パネルにビルが建ち、商店街のアーケードが長く続き、公共施設らしい建物が写っていた。高田の松原では七万本の松が津波に流されたと言う。一本残った「奇跡の一本松」に、いや、流されたであろう松と町に合掌した。神戸は十年と言われたが、東北は二十年でも元通りになるかどうかと思うと復興への道の険しさを最初の町から見てしまった。義捐金の早期分配と地元民の力を結集しての強力な努力が必要だと思った。ふと、先日亡くなった巨人軍の川上哲治氏の「無駄になる努力はない」という言葉を思い出した。

バスは、大船渡市、釜石市へ。大船渡市では巨船、飛鳥や日本丸が来て風呂を提供、釜石市では、日ごろの訓練が実って中学生が小学生や高齢者をリードして山に逃げ全員助かった話を聞く。訓練といざというときに、その訓練を生かす決断力、行動力が大切だと感じた。夕方、宿泊のホテルに着き、ここで地元の人話を聞き、ディスカンションを行った。十メートルの防波堤を信じた人が津波にさらわれた、先祖が『後世の物に伝える一ここより下に家を建てるべからず』という立札を立てた地域を無視して浜へ浜へ家が建ち、それらは皆流されたと言った話は、正に後世に伝えて、さらに強固で高い防波堤を建て、しかし、その防波堤をも信じず山に逃げることを心がけよと言うことだと理解した。

ひたすら大変だったのだなあと言うだけでなく、元気づけると同時に遠隔操作のむづかしさ、関西から何をすればいいのかを思った。

翌日行ったボランティア合衆国「遠野まごころネット」でも教えられることが多々あった。補助金が二年で打ち切れ、ほとんどが自費ボランティアの活動に頼っていると聞いて驚いた。こうしたところへこそ全国から集まった大金の中から補助金を出すべきだと叫びたかった。何処かへ行ってしまふ義捐金より、ひとりひとりが、支援活動をする人たちへの支援金を送ればどうか。東北へ行ってお金を落とすのもいいが、そうした応援もあってこそ距離感を越えた絆が生まれるのではないかと思った。